

炎のエスキス（残照編より）

母なるものへ

小林守城

これは詩ではない散乱放射だ  
壊れ散るものはやがて集束するの  
離散した家族の沈黙に

なぜ詩を求めようとする

これはどこから だれから

なんの残照なのか 母よ

「アウシュビッツ以後に

詩を書くことは野蛮である」

かつてアドルノは言った

そして私たちは忘れてきた

個の生きのびる幻影の都市で

あえてこの文明の時空に

もう一度 詩以前の詩が

見出せるかどうか

ヒロシマ・ナガサキの殺戮

そして三・一一のフクシマ

なるように しか なるのさ

風化の言葉が自衛のように

街角で交差し降ってくる

間違ってしまったに違いない

それなら引き返せるのか

私たちの選択肢に地水火風空

常緑の森の梢に水煙はあるか

菩薩よ なお進化の舳先を見出せるか

母よ 百三十七億年の太母よ

意味を問う姿勢や

最後の道化師のような勇氣に

忘れ形見に人の詩を見ようとしたら

なおしばらくは

生かされていくのだろうか

雪の日は野遊び禁止

小林守城

雪の言語野 犬の遠吠えは ぎりぎりの一行の詩だ  
おれもこっそり 吠えてみたくて 蝦夷の国から流れ出てくる  
水源へさかのぼる 青白いこの国の雪女 湿っぽくて温かく  
無いようであれ山頭火 生死の中の雪 癒しの空に降りしきる  
少年の日の雪の野遊び 雪は「です・ます」調に響く 母のメタファー  
おれは多少煙たかったが いまはもうそれも 遠い記憶の底に沈んで

花はいま負の力 ぎちぎちと 賢治の春の茸の歯ざしり  
雪は中也の悲しみに降れ 汚れた雪に哀しむ さかさまの時代だから  
雪降るときは ふるさとは戸を硬く閉ざして 離散する時代だから  
ふるさとは負の絆 傷だらけに狂った母の眼 もう帰るところではない  
真言は おそるべき歌になった 西行も芭蕉もアイロニーになって  
童心は虹か 恐るべき子どもたちの シャボン玉はもう飛ばせない  
積もった雪の中の雪 さみしいみずぐは チェレンコフの青白い光に  
もうカルモチンはいらない 薬剤は呑むまでもなく 見えない物理に曝されて

水煙のある炎の稲穂 地水火風空 たたずむ棚田のおんな  
空海は石を持って追われるごとくか 水こそ文明だった 母よ  
花のような雪の結晶 いまはその 惨たる事故に対処せよ  
屍体は梶井の 桜の樹の下に埋め 美醜は生命倫理でもある  
おれは体を失った 想念の道化師でも いざ不条理に反旗を打て  
ただの人の無援の位置から 雪博士・中谷宇吉郎のその遺言に  
込められた祈り 「雪は天から送られた手紙である」ことに架けて  
いざ打とう 沈黙に対生して 軽い言葉の散弾銃でもやたら  
打ちまくるしかないのだ 雪の言語野にただ 自らを閉じ込めて  
野遊びが禁止された 雪の日には後ろめたく 憤る火遊び